

105

寛永諸家譜

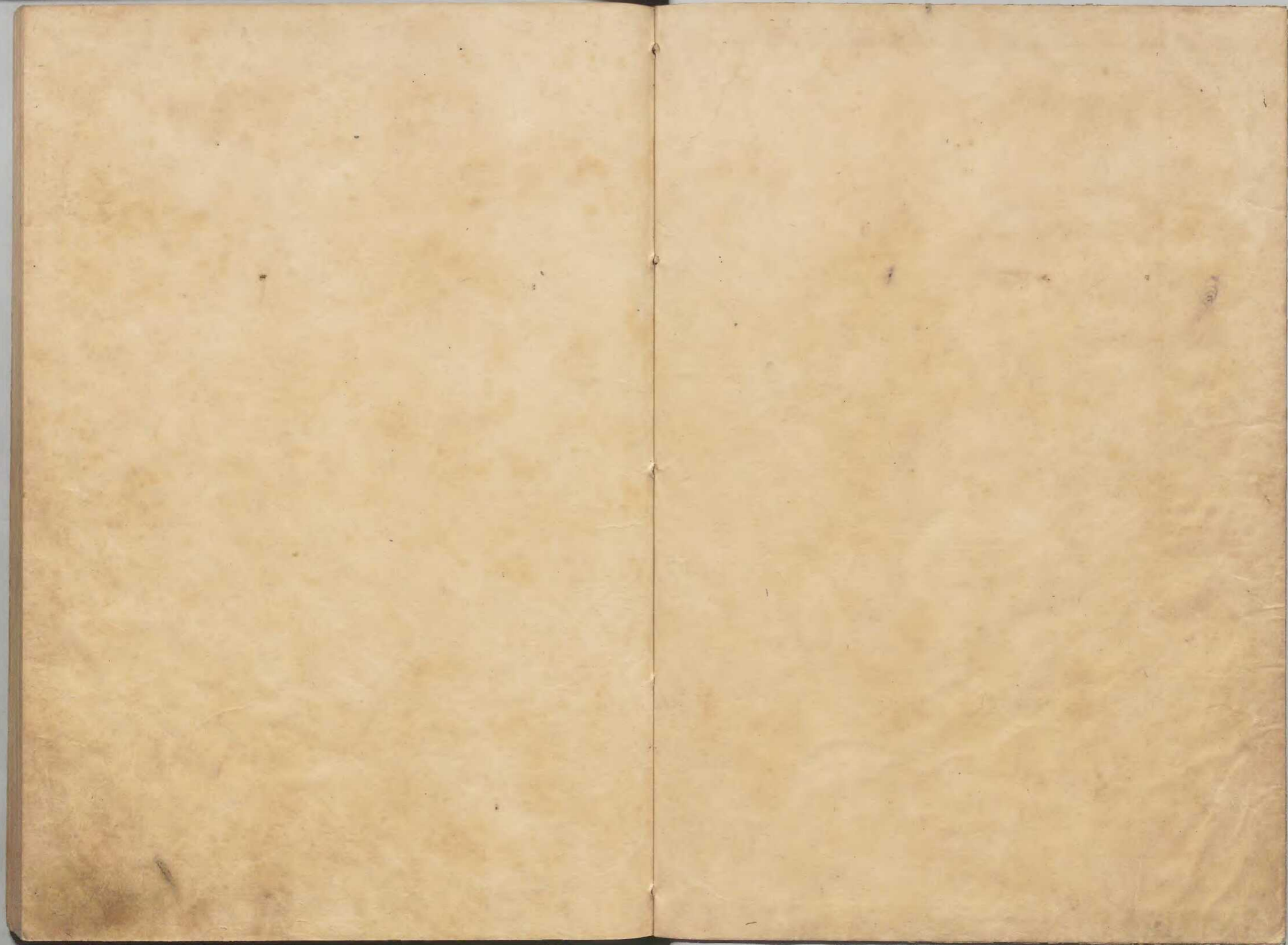
藤原氏已四冊之目  
利仁流

|      |           |       |   |
|------|-----------|-------|---|
| 内閣文庫 |           |       |   |
| 番號   | 和         | 20199 |   |
| 冊數   | 186 (105) |       |   |
| 函號   | 特         | 76    | 1 |



Kodak Gray Scale  
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19  
© Kodak, 2007 TM: Kodak





秋友

秋筑

進友

進田

竹田

竹林

寛永諸家系圖

藤原氏

已田 小 家

利仁流

秋藤

家傳  
後胤  
秋藤別當實盛

某

大兵衛尉

淺草文庫

某

伊豆守

利之

内務物

ふりめ之好修理大夫よりきこひを  
先手松山新物より一京部白河の  
軍事とつむ之好これと懸美と

うのら漢列りともじまき舟藤  
義新よりつよ義新父山城守道之と  
お戦ともき利之軍功わりこみゆ  
り小書江の口とよづ  
ま度稲葉一揆より川にそく磯田信長  
りきこひまよきとひそくま  
つよきつよ信長これと感と之因  
賜わりうのら明智日向守光秀より  
つよ光秀丹波と撃平らまき利之

小山乃城おのぎ自小山民たみ被おぼ虜らを討うち

しり

天正十年六月山崎合戦やまざきがくし一利之いちりのち

進ま之の入井川乃邊いりいづの一利いちりのち

光秀みつひでが山乃手やまのての諸下敗北もろしたばいと申まをす

一利いちりのち之の子基平こきへいがはび

信濃守しんののかみと百回ひゃくかい入いりし率ひら光秀みつひでが

勝新寺かつしんじ一入いりし入いりしといふはらしを

討うちしりしといふはらしといふはらしといふはらし

もこれと感かんじつわいけい光秀みつひで

志しのぐみ城しろとあいはらせしわり

得長とくちやう寺てら院いん俗よこ行ぎやう之の十じゆ之の石いし乃邊の邊へよしといふはらし

一利いちりのち之の勇ゆうといふはらし

志しのぐみ城しろとあいはらせしわり

いいづら四よ十九じゆう年ねん一いてし死しといふはらし

湖蘇こそ憲けん西せい

某

虎松

十一歳引く死に 法衣香岳月光

某

甚平

十九歳引く死に 法衣香岳甚

利宗

信波守 淡州安八郡楚保引く生

とどめ明智光秀引く馬一丹波引  
ととじき波多野と撃つ河中央  
とひく野く懸産巫と絶つ一  
首とゆくり

天正十年光秀本能寺と龍巻とき

利宗兄甚平と別引く戦功あり

平子孫傳次信長乃瑾と著一抜余の

長刀と柄く甚平とわひく

甚平孫傳次と討とらるとき利宗と

又定信基物と陸を合えこれと討  
同十二年尾刈小牧討陣乃わひひ  
秀吉堀乃其の替へ命へ之樂田と  
戸りりしし橋系一決長谷川故み  
小牧一居し七月二十七日樂田より  
小牧よむふとき一決其期と察し  
之わひしし利宗江流大橋系土佐と  
おがくくるとらむく敵陣より  
小澤系と討し

文禄年中物群陣乃とき利宗  
か藤肥後守清正よりきしづみ海  
て互陣と蔚山乃城と攻しとき筑あ  
合台秀秋ハ山乃の大將也清正長曾  
家部宮内と船乃乃大おとありし  
山乃よりときしづらむく蔚山よ  
い海よりよむし利宗戦功を励む  
清正これとんと飯納乃とき系地と  
くしづ

寛永六年四月二十七日

將軍家

宋地と評領と

同七年 作

与力十跡 是怪

後入位下

酒井 雅

横波 忠勝

新

御厚恩 大章

川

女子

宋四源

某

又

小

文

ひ



城乃色入一東と云ふ又昔清との見  
とるなり之敵乃踏と察一とくその  
地乃昔と下知一に戦事ある度城と  
了りりり十日許なり小あこれと感  
賞とやうら敵乃為松東家と云ふ  
又功なりぬ小あこれと徳美と

之存

与之志束の 生玉古徳

長曾我部氏一原一他石控昔米と  
とるに昔後一とむき一却志美津  
一とむのく薄別乃昔とに戦と  
き之存ある度戦功なり其後加藤  
肥後守清正一原一に以とるなり  
物難敷度乃軍事とつとく漢南  
乃昔競東河と云ふ味方乃昔東一  
系一とくこれと龍家一とくこれと  
之存我功なりゆへよ清正これと

貴美と

寛永八年之存今台秀秋一志  
こづひ伏見乃城とせめ之戦功  
あり

同年冥原台戦乃とき之存の石  
掃劫と生捕之秀秋一献  
元和九年よるあしれ大坂台戦乃  
とき之存過孫次清と討とら  
同年二千石乃領地と給

葉

葉

同九年御指箇乃頭とあり之  
様六十人とあり

寛永二年十二月一死と業  
八十六法名道中

白大夫 十二歳より一死と

七若清 四十歳より一死と



同十一年采地とく之と傳ふ

同十二年十二月晦日從入位下

叙と

同十三年 作おん入りより入りて歩卒

乃以なりとるり

同十四年領地とく之と傳ふ

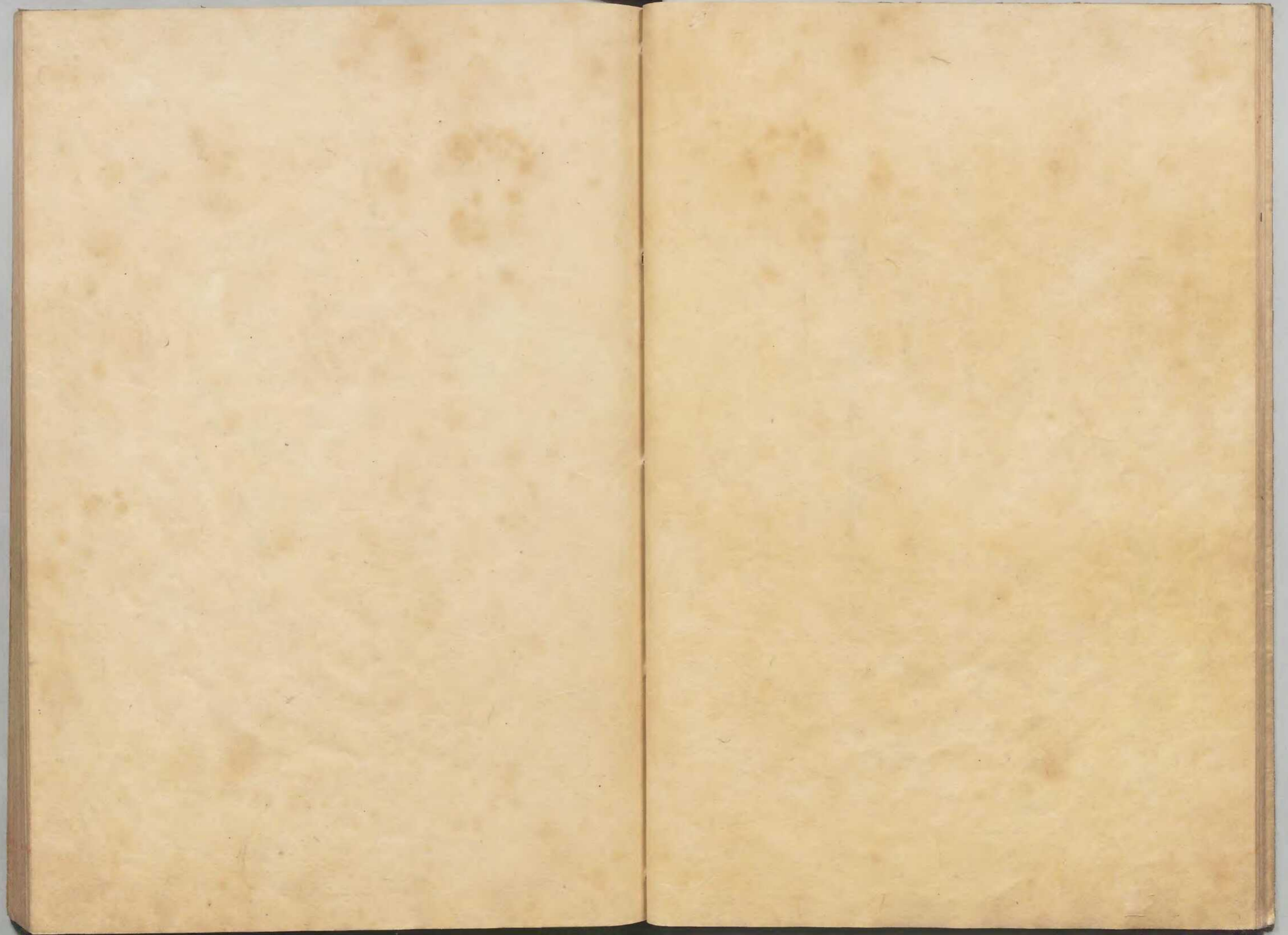
同十八年清小控領乃番ばん以なりとるり

同十六年食邑とく之と傳ふ

家紋

明佳あけ麦あし

石置いし



赤藤

● 利基

伯耆守

生玉越中

越中新河郡地尾乃坂ノ庄

信利

次郎右衛門尉 生玉河守

地尾乃城より石と

長田信玄信利が許し一使と差

越軍の事とこころし心と又

書とわらふその詞りいしく

来秋に備ふ一談合中一交理亮

山内義朝一同勝具瑞泉あらし

以五人取知る名中速以等略に後

聊を疎ましく可涉ゆあふあ御可

と波はと作とて謹云

六月十一日 信玄書判

母散取

信利頼朝漆るるびり時衣等と

川之織田信玄同信忠より秋とら

事数度有り信玄信忠毎度回京と

し海よりつら信玄よりつら信の

字とこころし信長共しつら

東照大権現御書と信利よりつら

その洞ほら入りいんく

其國そのくに涉せん本領ほんりやう事こと新あらた之の名なおと  
其旨そのしむ可べ被ま勸すす我功われこう之の状しやう如ごと詳じやう

天正十二年

六月十二日家康涉判

母友次郎右忠の尉友

信利のぶとし為な書かきと

大権現おほごんげん一いつつつくく海川うみがはるるととくくああよ

涉せん感かんわわりりくく明あきくくししけけるるとと涉せん書かきとと給たまは

ううののららをを別わか濱はま松まつりりととりりししきき

大権現おほごんげん一いつつつくくくくくくくくくく

天正十八年八月四日城別じやうべつ伏ふ見み今いま

ととりりくく死しとと業わざ六十七むそぢ 法名ほふな日涼ひすやう

信者のぶぢやう

久右忠の尉

信者のぶぢやう一いつつつくく兄あに信利のぶとしとと同おな信のぶ乃の字な



とく浦ふうのらを別よとみく  
めしれく

大権現より湯一くく川に

古酒院殿よりくくく浦る

安長六年一古田津乃とま

作とくくゆり新田の年ゆとる

このとま敵告城といく東家信者

いゆ

古酒院殿乃浦下知とまくくくく

くお浦一り酒とわくくくく

より信別台書より迂るのり

ゆ一り皮地よ住とる事之年也

のらゆ一くくく川よとる

作一りよりく大沙番乃地取とる

安長十八年一十二歳よりく

信正

久右衛門尉 生玉後河

白河院殿よりつとくく戸川に

大番乃地以とるなり

寛永十八年大坂津城番とつとあ

ういしとひく孔とみ十兼

信秋

八郎普永 生玉武苑

寛永十一年

將軍家よりつとくく戸川に

信清

徳右衛門 生玉武苑

寛永十二年

將軍家よりつとくく戸川に

利次

新八郎 生玉越中

天正十七年

大樽現よりつとくく戸川に

寛永十年一月二十八日之十二日  
〜〜〜 法名克月

利治

次郎右衛門 生國該河

実原津からびり 大坂西度乃津

津のとき

大指現より信守とすのころ

名津院殿

將軍家よりつゝ〜〜〜川

寛永二年七月十九日江戸よとひ  
孔と峯四十之 法名田級

利政

左源右 生國該河

寛永九年

名津院殿よりつゝ〜〜川

同十年先利次が遺跡とす

大坂西度乃津津より信守 念也

とく〜〜川

寛永十年

將軍家より領地子石とくは

利安

百九郎

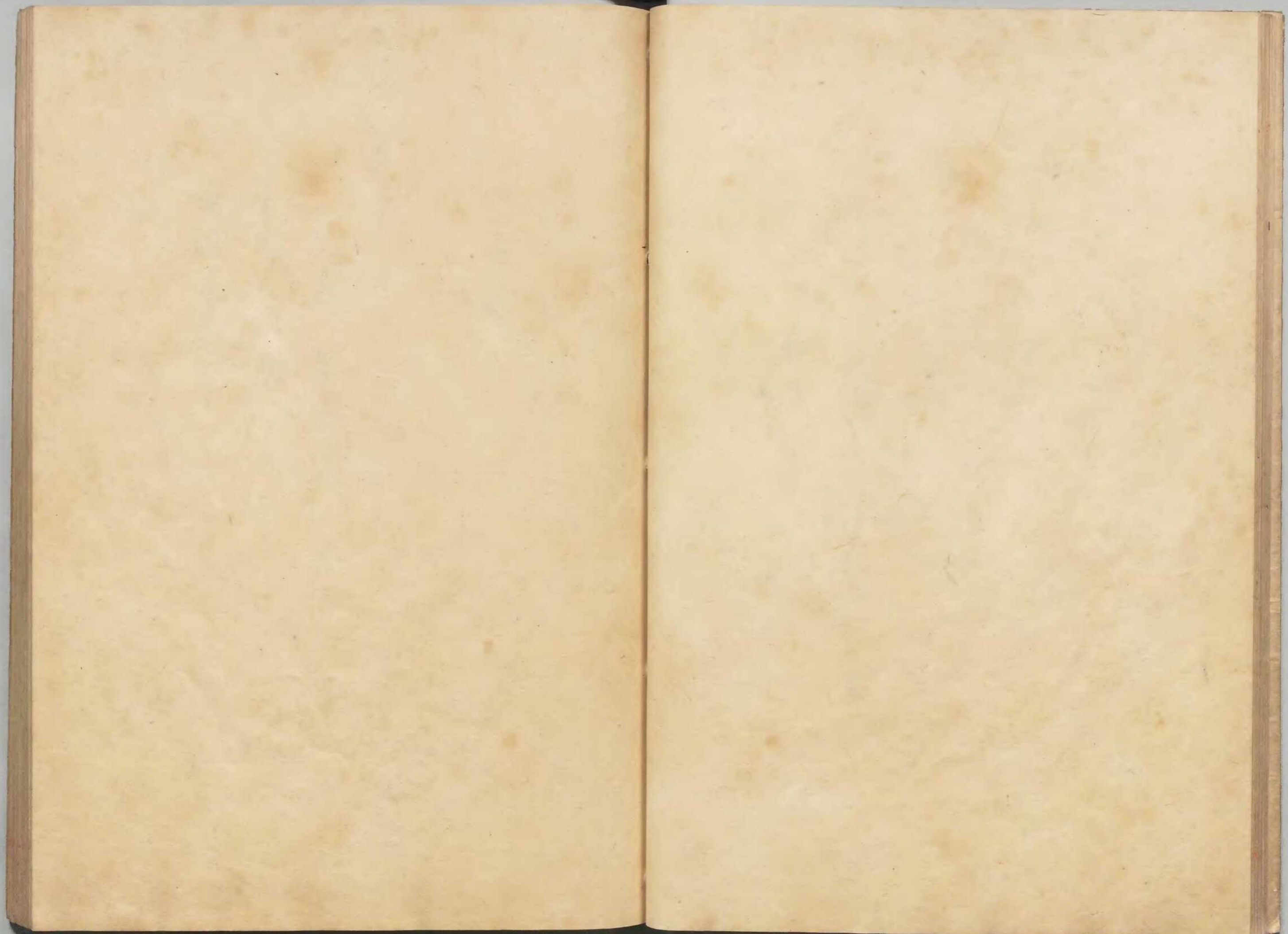
生玉茂

二輩より久利治が家督とつ

將軍家よりつとくは

家紋 横本丸

信清が家紋 丸乃門二引 曜麦



新藤

久次

文苑  
生田冬河  
法名教善

東照大権現

台座院殿  
一  
つ  
く  
く  
戸川  
家

次綱ツギノ

文翁ウヱノ 生玉ナマタマ 武翁ムツノ

實ヨシハ大草オホクサ次郎ジロウ右ミドリ赤アカ子コ有アリ久次キウジ翁ノ

子コとト

右ミドリ酒サケ院ヰン殿ノ子コとト川カハ邊ノ

正久マサヒサ

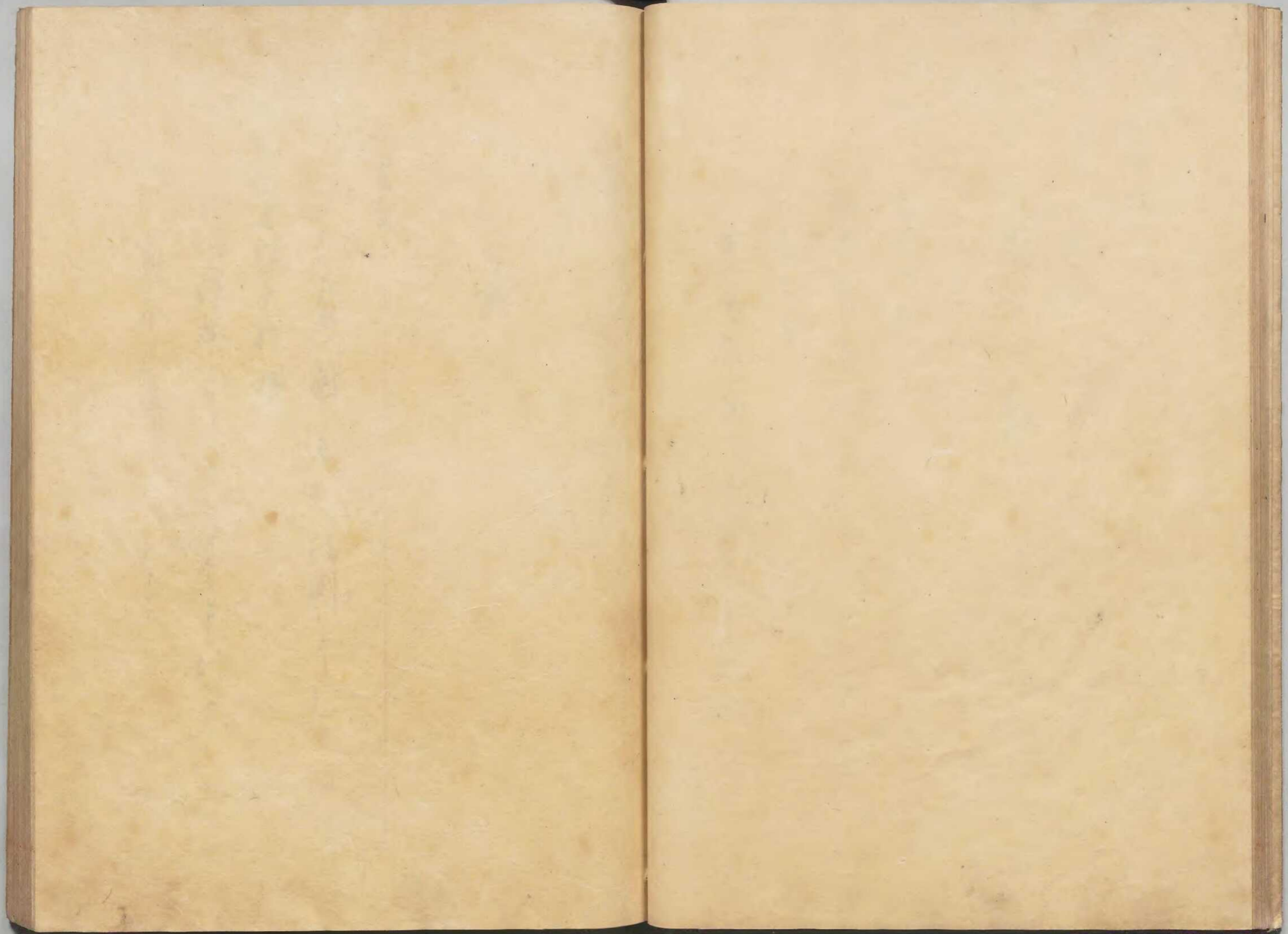
文翁ウヱノ 生玉ナマタマ 翁ノ

實ヨシハ大草オホクサ中ナカ右ミドリ赤アカ子コ有アリ次綱ツギノ翁ノ

子コとト

將軍家シヤンクンカ子コとト

家カ級キウ 下ゲ麻マ





伊藤

● 室長

功左衛門尉 尾州清洲より江戸

東照大権現

台漣院殿より江戸平戸川

寛永八年より死

室成

地左衛門尉 茂列<sup>しげ</sup> 伊予<sup>いよ</sup> 守<sup>まも</sup> 戸<sup>と</sup> 守<sup>まも</sup> 氏<sup>うぢ</sup>

名酒院殿

將軍家よりつとて戸川<sup>とががわ</sup> 氏<sup>うぢ</sup>

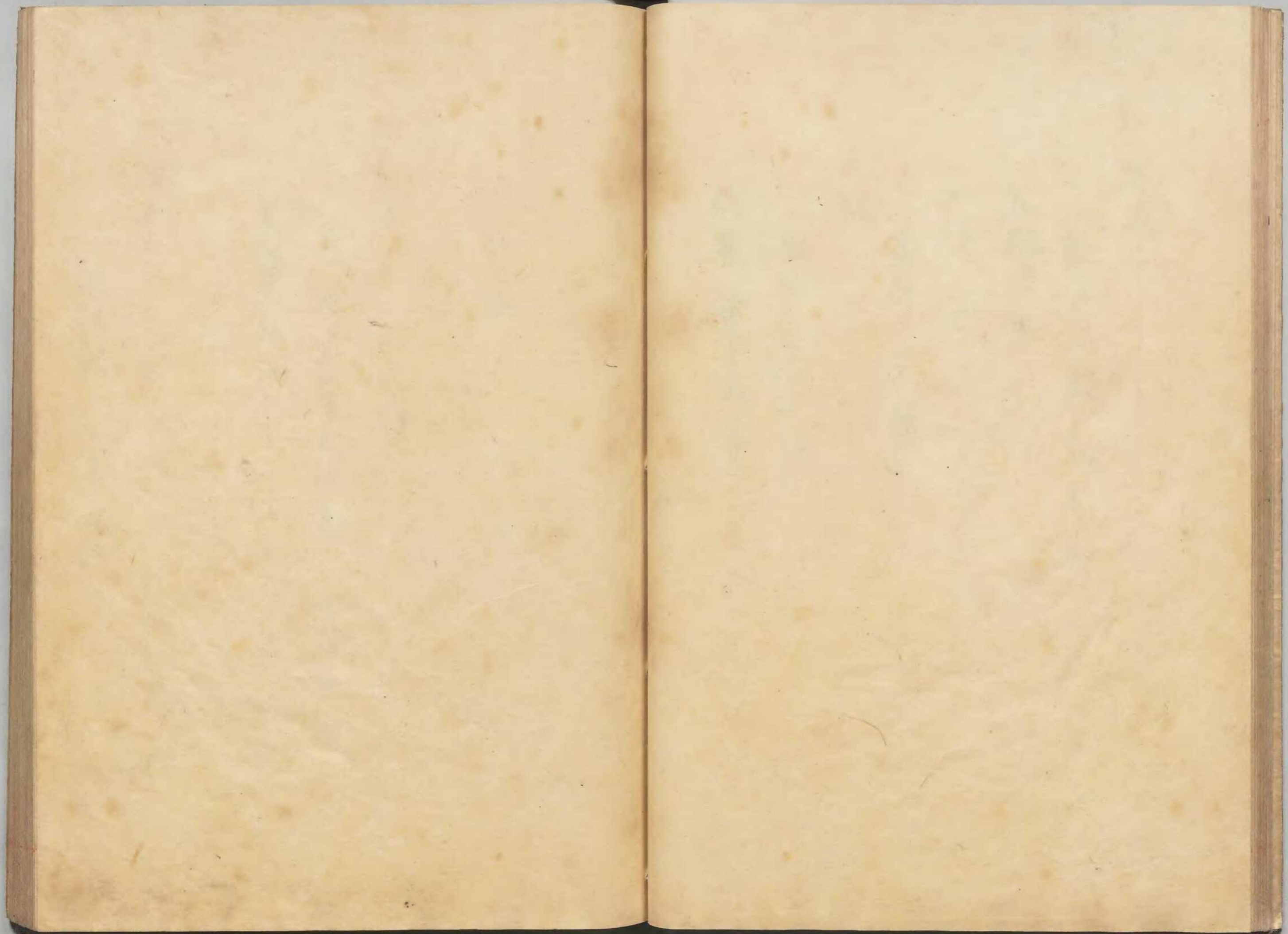
正元

地内 生玉河<sup>なまたまがわ</sup> 氏<sup>うぢ</sup>

寛永十八年<sup>かんえいじゅうはちねん</sup> 月<sup>つき</sup> 日<sup>ひ</sup>

將軍家よりつとて戸川<sup>とががわ</sup> 氏<sup>うぢ</sup>

家紋 下藤丸<sup>しもふじのまる</sup>



● 義勝よしかつ

新藤しんとう

平純ひらじゆん

本庄伴直ほんじやうはんちき

法名道勤ほふなみちしん

東照大権現とうしやうだいこんげん 一いつつつ人ひと多おほくく川がはをを

義次よしかつ

小笠原尉おがさわらゑい

生玉之河なまたまのがは

右瀧院殿よりつゝくす川

寛永八年六月十八日より死

法名一翁

義久

平九郎 生玉武藏

右軍家よりつゝくす川

家紋 下藤丸

新藤

吉包

平右衛門尉尾羽清剛よむ戸部  
織田信長より

吉澄

平藤 生玉河

東照大権現よりつとくす川

吉勝

長石赤つ尉 豆列之崎よりむ川

白滝院

將軍家よりつとくす川

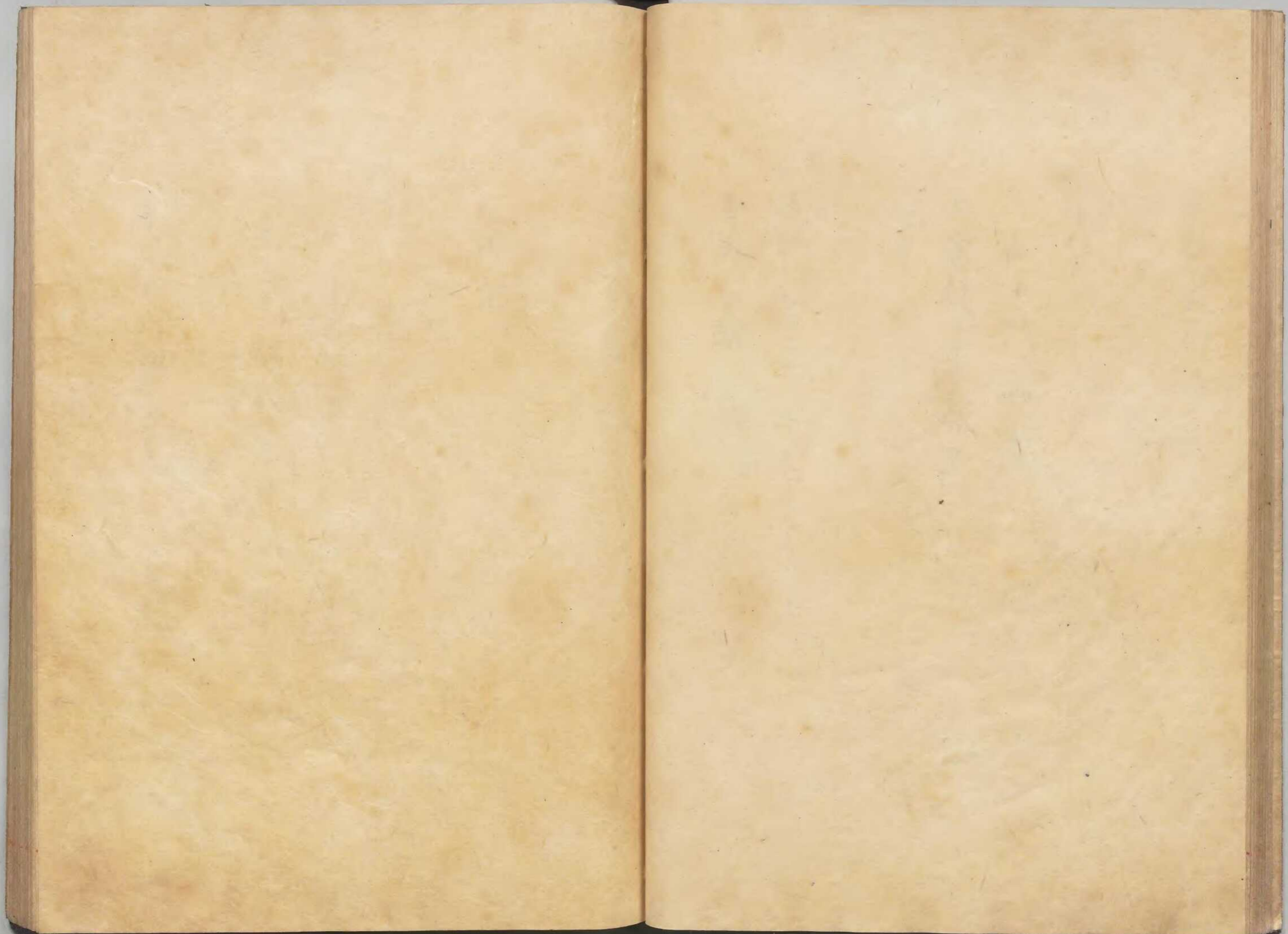
吉之

忠之郎 武列の戸よむ川

白滝院

將軍家よりつとくす川

家紋 下藤丸





政勝

新藤

六郎右衛門尉

生玉尾張

聖別 濱松

孔

東照大権現

改忠

宗象

宗印

大権現

白滝院殿

安永十二年六月十二日

六十九歳

初乃名々全巻 生玉

改吉

全吉郎 生玉河原

安永十二年十二月十日

大権現

白滝院殿

將軍家

忠勝

忠次郎 生玉河原

元禄六年十一月

將軍家よりつゝくく戸川

寛永十年六月 作よりより

小十人の地取とる

家紋

徳心とくしん

雁かり麦あは

● 集

母藤

宗林 生玉尾張

東照大権現よりつゝふしうへく戸川河  
元龜三年を別之方原合戦より  
討死



將軍家一一人多々戸川

實父政直 生玉大和

宗源院殿一一人多々戸川

寛永十一年乙卯七十九年

家級 園心一一人 豐佳

● 信定

横井河内 生玉甲斐  
武田信虎

新藤

本名横井氏より幸保より  
新藤と稱す

信忠 のぶただ

橋井安藤 はしがいやすむね

氏田信玄 うじのぶのぶ

天正十年

東照大権現甲別湯入玉乃とき

とくし

右酒院殿よりつとくしつとくし

幸保 ゆきたも

善右忠尉 ぜんえ

お軍家よりつとくしつとくし

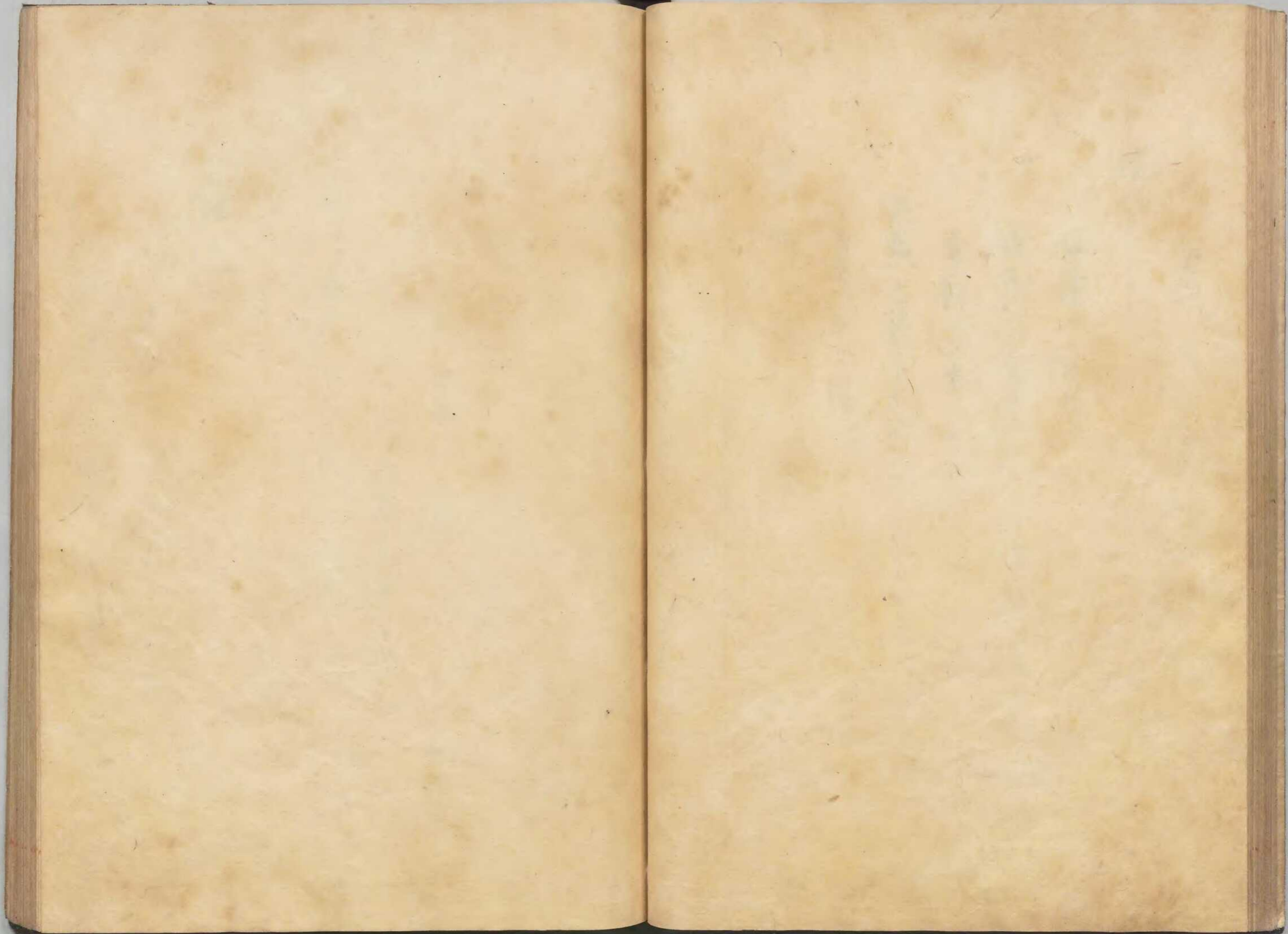
幸保病者よりつとくしつとくし

橋井とわつとくしつとくし

母散と号と

家紋 又 聖徳太子 あつとくし





● 春 經

都 筑

中名ハ源氏傳ノ本ノリトイヒトモ秀經  
ノ一ノリトイフク都筑秀景ガ家督ト稱  
藤氏ト云ハハツク

修々木源之秀義四代ノ后胤  
左衛門尉 左兵衛尉 左兵衛尉  
近江使

長鑑ながたか

左衛門尉

長政ながまさ

貞長さだなが

左衛門尉

長鑑ながたか

氏鑑うぢたか

長政ながまさ

貞長さだなが 長政ながまさ

高長たかなが

長政ながまさ

左衛門尉

長政ながまさ

河内國海郡松下河内國海郡松下 長政ながまさ

長政ながまさ

長信ながのぶ

源左衛門尉

國長くになが

長政ながまさ

國經くにのり

源六郎

長範ながのり

源六郎

為雲なりくも

源六郎

秀經ひでなる

源六郎

利仁の末孫初筑前守助秀京の長男

の人也のらし川氏真一房一と

を別より川氏秀經とわしあると

子と一取替とつがし心こりゆし

松下とわしめし初筑と号し源

姓とわしめし藤原と称と

永祿十二年

東照大権現を別湯入玉乃とす  
・是く中頃より湯並判乃湯  
書これあり

元龜元年江州堺川吉我乃時  
・此川とめ首級とるより志より  
武田三景年乃我あり  
・此川とるより志より

安永六年七月廿七日

第六十八 法名成金

為政

元龜元年

・是く中頃より湯並判乃湯

書これあり

元龜元年江州堺川吉我乃時

・此川とめ首級とるより志より

武田三景年乃我あり

・此川とるより志より

いとむとくはゆり

天正三年長藤宮我乃とす供年

とつとあ首二級とゆくり

同十八年小田原陣乃とす小條

と束つ大支山中乃城とより

縄乃城より指第このとき為政

智略とゆくりと束つ大支として

大指現乃魔下より居せしむり

ゆりて是迄秀吉より感懐し

羽織とゆり

安永十年

右酒院殿沖入治乃とす近藤石見守

るゆり為政治経年ゆり

修年と

元和元年大坂陣乃首為政眼

とすゆりゆりゆりて修年とつとあ

正治戸より乃ゆりゆりゆり是狂

又十人ゆりゆり大守乃ゆり守

同八年十二月十七日孔と兼六十八  
法名全全

為次

承左歩尉

寛永十七年

酒院尉と并

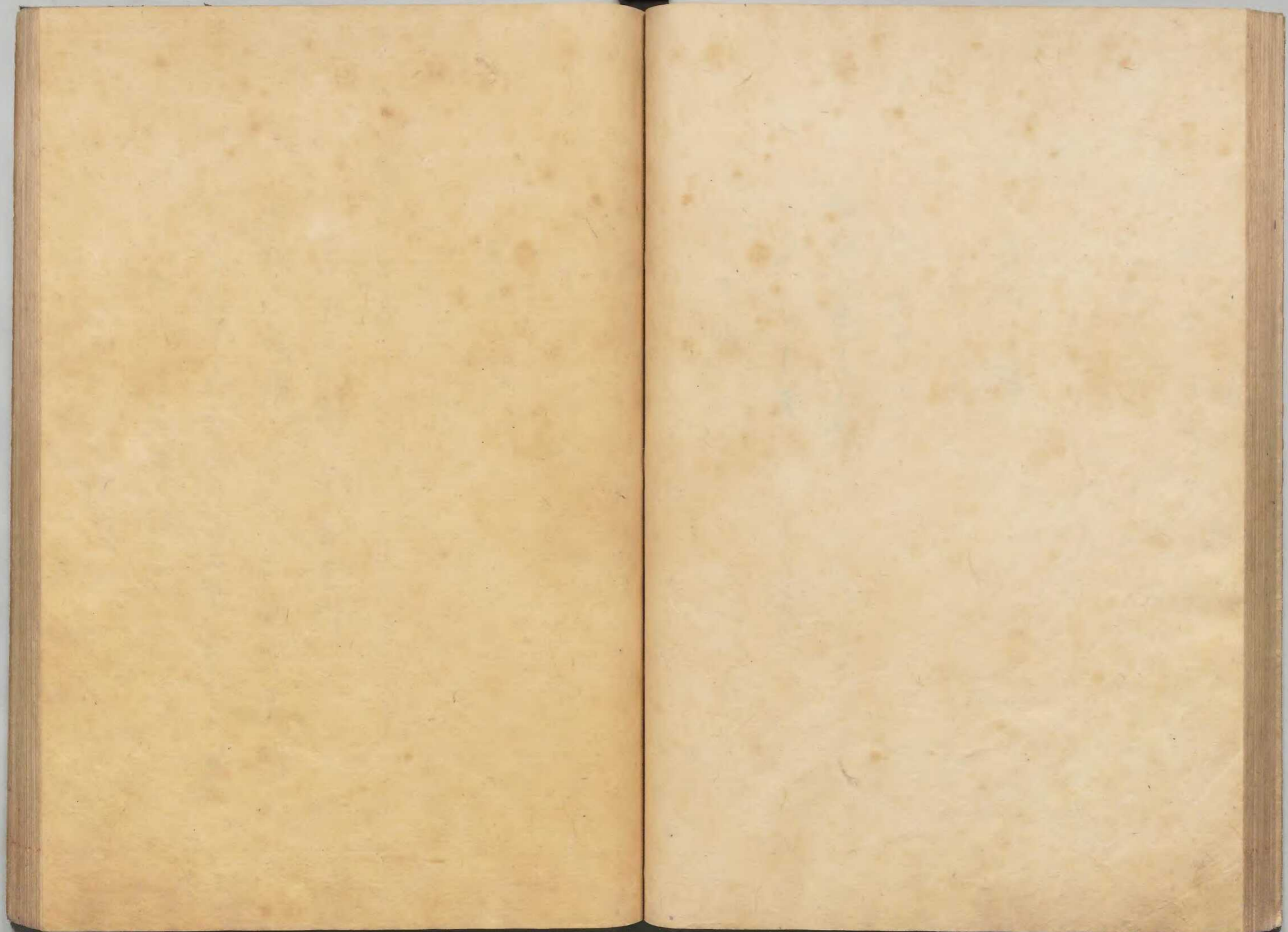
為基

承十郎

寛永十年

將軍家一

家紋  
鞆





初筑

● 吉久

市石部<sup>いし</sup>の尉 生<sup>なま</sup>出<sup>で</sup>冬<sup>ふゆ</sup>河<sup>が</sup>

東照大権現<sup>とうしょうだいこんげん</sup>よりつるく<sup>つるく</sup>戸川<sup>とがわ</sup>

安永十<sup>やすなが</sup>六年<sup>ねん</sup>正月<sup>しょうげつ</sup>二十<sup>にじゅう</sup>日<sup>にち</sup>死<sup>し</sup>止<sup>と</sup>業<sup>ごう</sup>

六十九<sup>むそくじゅう</sup>法名<sup>ほふな</sup>淨<sup>じやう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>

法久

平右衛門尉 生國河原

實と幼筑之の物政者か子あり吉久  
やしむのこ

寛永十三年十一月十三日死と葬

六十六 法名ゆゑ

宗次

市右衛門尉 生國河原

右近衛殿より

寛永十五年八月廿六日

宗次

百子代 生國河原

則久

平藏 生國河原

將軍家より

寛永十二年十一月廿九日

法皇

平右衛門尉 生玉河

寛永九年

將軍家（とく） 孫（とく） 孫（とく）

法勝

二郎右衛門尉 生玉河

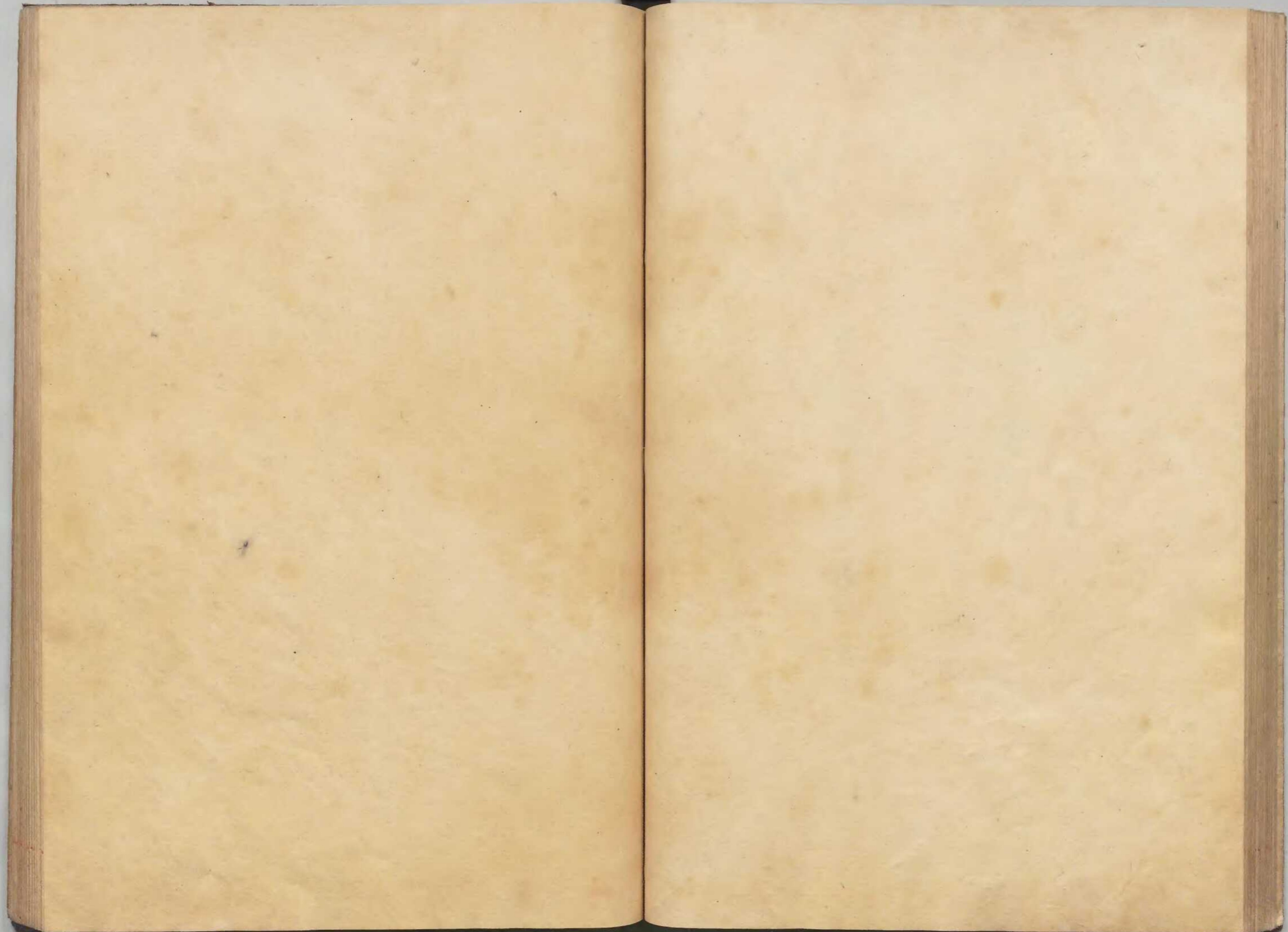
寛永九年

將軍家（とく） 孫（とく） 孫（とく）

則次

平七郎 生玉河

家紋 一文字乃下裁



正友

太郎次郎

牛國河

正勝

小之郎  
清康  
牛玉  
河

幼執

廣忠郷よつふ戸川へ某乃場  
一とひく討死場処分の有るに

正秋

孫十郎 生玉河

東照大権現一つふくつて戸つる

天正十二年尾羽長久手合戦の

とき討死

正重

普普衆 生玉河

慶長二年

大権現一つふくつて戸つる

同六年小山原両津ありびよ

大坂の度乃津津よみか供奉と

川とむ

大権現豊洲のころ

一、初尾正重と云ふ

名 濠院殿より鴻と一つくく州しゅうを

寛永かんえい六年ろくにん二條にじょう乃の涉城せつじょうよりとままく

鉄炮てつぱうの役人やくにんととるる

家級けきゅう 七しち等とう

都筑

● 勝吉

又若清尉

生玉彦河

廣忠卿ひろちか 一いつつつふふ戸こ川がりりそらら

東照大権現とうしょうよよつつふふくくくく戸こ川がりりさ

大権現だいこんげんそそのの片かた秀ひで吉よしとと合あ戦いくさ乃のとときき勝かつ吉よし

右功みぎこうととつつとと一いつつつふふくくくく戸こ川がりりささ 冬ふゆ別わか山やま奴ぬ四よ





大指現一ノ并湯一ノく戸川ノ主候

白酒院殿

將軍家一ノつふ戸川ノ父膳時ノ送函

川三ノ清殿主ノ番と川と

家紋 七曜

初流

政武

又右忠尉 生玉卷河

安長九年

台酒院よりあつた大湯番とつとむ

元和七年湯校持方と支配とつとむ

厚新とつとむ

寛永二年六九 元と兼四十一 法名  
兼宗五八

改成リカセ

又右忠シ 生玉茂シ

寛永九年七六

將軍家シ 一シ 一シ 一シ 一シ 一シ

家紋

卍字

● 集

加筑

ふしめを松平氏より政者より  
之をうめて加筑と称す

松平代渡 生玉冬河 法新して権宗と  
号す

东照大権現よりつくりし



家紋

沢さわ深ふか

● 秀次

志村孫五郎 志村氏也秀勝より

東照大指現よりつとく

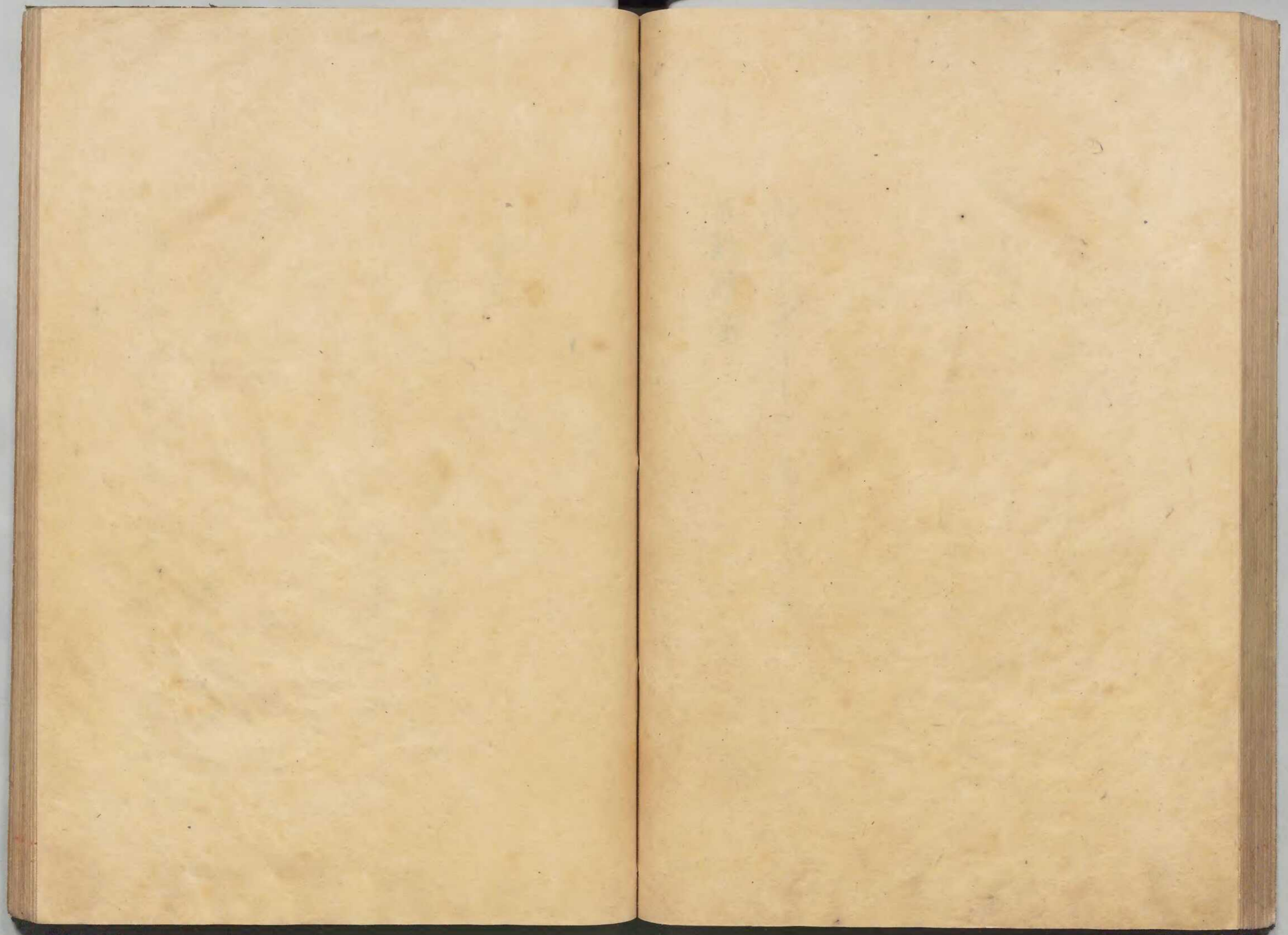
元龜二年之方原合戦乃とす討死

幼流

わ〜〜〜志村氏也秀勝より〜  
わ〜〜〜幼流と号す







● 政直

し初兵庫 ころどめ乃名を源次郎  
伴勢安流初志布美の城一居

進藤

本し初氏源頼政が苗裔なりと傳  
稱どめらわくくま敷と号す

源次郎 生玉河あ

織田信長乃叔母とありとるわるとま

信長の命いりうじく町つゆへり

織田と野分ひそくに源次郎と稱ひら

し源氏とわらわめを源と稱ひら

ありこれ信長乃思ふとるを

まじくあり

正次

之右衛門尉 生玉河あ

宇部多中納言秀家よりつよ

安永六年実原一戦のころ

東照大権現正次とあり秀家が事と

とせ給ふ正次とありいよく没落

のころありとるはとる日あり

ゆきあをいりていりたり

作有けるハ秀家ハ敵なりといふも  
正次ハ君臣乃君臣故とつて是も也  
と云ひ他家ハ一属と云ふと云ふれ  
と云ふ移くべしと云ふは此の地ハ  
魔下ナリ属一と云ふ所ナリ  
百両と云ふは此の地ハ秀家平生所  
乃口ナリ一玉次ナリ  
正次作と云ふ物ハ流別関原乃色  
一ゆきと云ふは

大権現一と云ふ所ハ此の地ハ秀家

流浪一と云ふ所ハ薩摩玉と云ふ物

本多と云ふ所ハ外酒山と云ふ所ハ正次

と云ふ所ハ秀家一と云ふ所ハ此の地ハ

秀家乃一と云ふ所ハ関原乃色一と云ふ物

正次乃一と云ふ所ハ此の地ハ

昨日なりと云ふ所ハ先日正次が云ふと云ふ

と云ふ所ハ此の地ハ

正次が云ふ所ハ此の地ハ

大権現正次たごんげん しょうじが右みぎと感かんしつ

慶長十七年七月四十九日けicho 17 7 49奉ほうり

孔こうと 法名ほつな月つき定ぢやう善ぜん照しやう

正成しょうじやう

之これ存ぞん忠ちゆうの 生なま玉たま因いんあ

駿府すまのふより

大権現たごんげんより 祿ろく賜たましり 作つくり

物ものり

白瀧院しらかたに殿のより

正忠しょうちゆう

九く存ぞん忠ちゆうの 尉ゑい 存ぞん列れつより

慶長十八年十月けicho 18 10之これ奉ほうり

白瀧院しらかたに殿のより 賜たましり

寛永二年かんえい 2涉せつ中ちゆう院いん番ばんと川がわと

同九年どう 9より

將軍家しやうぐんがより 涉せつ小せう院いん

継乃壽と川とむ

家紋

三引

くしめし社氏乃時矢筈と引く紋とむ  
のら名取と稱しこよりこれとむ

某

正回

長原<sup>チハラ</sup>と号<sup>ナリ</sup>と 牛玉<sup>ウシタマ</sup>冬河<sup>フユカ</sup>

廣忠<sup>ヒロタカ</sup>卿<sup>ノ</sup> 一<sup>ヒト</sup>つふ<sup>ツ</sup>川<sup>カハ</sup>の

某

長原<sup>チハラ</sup>の尉<sup>ノ</sup> 牛玉<sup>ウシタマ</sup>河<sup>カハ</sup>の





正勝

長兵衛尉

牛玉同家

右衛門殿

將軍家

家紋 丸乃内子 曜彦

● 守種

右左衛門

生玉信流

竹田

守次

物左衛門

生國河原

右左衛門 武田信玄 河橋 頼一 了

三好

東照大権現甲別新府へ湯あるの  
とき苦肉の計が家人とありと  
わらせ忠節と川をさしゆへ  
めされく

大権現へつゝくさくさ川  
を去る年一実原陣乃とき大久保  
お控守大津が地へ居へく信守と  
川とむ

大坂あゆ陣よ本あゆ渡守正信へ  
居へく信守と

寛永十一年八月二日七十の歳よ  
へく信守と

守明

勤王あゆ 生島と野

右酒院殿

將軍あゆへつゝくさくさ川

家紋  
升の  
折り

● 政次

竹田

隼人 生玉

織田信長

天文亦之年

法名正春

政長

助左衛門 生玉河

信長

寛永十三年二月十日八十六歳

少一と記す 法名通玄

政忠

六郎左衛門 生玉河

寛永六年

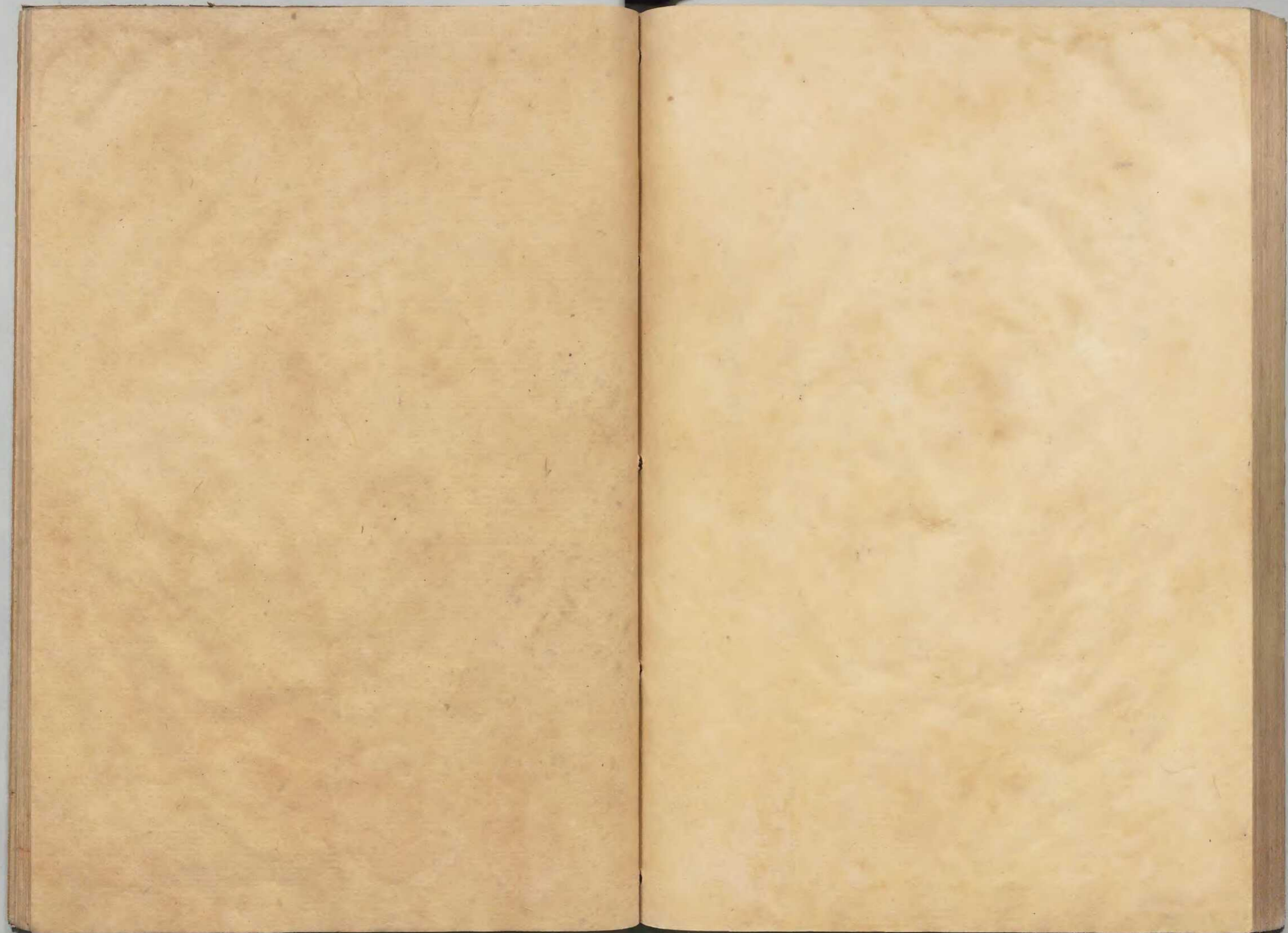
將軍家酒井雅元酒井の以右世酒井酒井の漢政守左衛門

善山善山の大藏少輔少輔の章成章成の命命の一と記す

いづる政忠政忠の美濃郡美濃郡の八藏八藏のが甥が甥のとす

いづる一と記す

家紋 桐菊 替紋 上藤の丸





正勝

林

又之郎

又右邊尉

生玉紀別

吉勝

又之郎

右邊尉

生玉紀別

四歳少く又よりとく北紀別より

信時

持別大坂よりいづりて後京都より  
事之居位と別髪一之理母と号と  
元和元年正月廿九日死と年七十二

孫一郎 孫次郎 生玉因あり

二歳乃時母と伺トく吉勝よと

がひく別より大坂よりいづりて

京都よとりじまきとく居位と別髪

志之林入と号と

寛永六年六月十六日死と年

八十三

信澄

孫一郎 生玉山城京都

別髪一之永喜と号と

幼年より字とこりて又倭歌の

道よりと号と

寛文十一年

東照大権現の御みまより

左酒院殿と御みまより

永喜亦曰哉

同十七年永喜御みまより

時より二十八歳

左酒院殿茂別しげふ尾お菅すげ村むら少すくく入い百ひゃく又

十じゅう石しつの采さい地ちと一いち酒しゅ先せんより日にち取と

涉せつあにゆりく顧こ問もんよりわが

又祈いの牒てつの事ことわれど常とこにこれな

わづらう法はう中ちゆう方ほうの祈いの禱たう等とうこれ

阿ある時とき毎まい度どこれと沙さ汰たと

元和二年

大権現おほごんげん齋さい浦うらの時とき永喜えいき苗なへ光みつ房ふさ信のぶ正ただ

天海てんかいと因いんとく 仰おほせと仰おほせりて

京都きょうと小こいより 祈いの禱たうの事ことと仰おほせり

菊亭きくどう右みぎ府ふ情なさけ季ときホリおわらう

つねに奏そう問もんと仰おほせりて 旨旨と仰おほせりて

江戸入り久家

寛永三年

白瀧院殿

將軍家湯上湯九月二条の城より行幸

のとき永喜田、當中にありて

年老宿別廷乃片と法事と評議

しるごとく永喜志ごとくこれを

わたりしき

同六年十二月晦日 勅命に依り

刑部卿法中に叙と

同七年十二月

白瀧院殿湯不例のとき永喜田兼

湯前り何作と

同年食禄之百俵とくまの湯

同九年正月廿四日

白瀧院殿湯湯場上寺少く湯仏り

ありしとき永喜これよおもむく

長坂湯年忌乃とびごとく

涉廟前たがひの作しと

同十年

將軍家の作しりよりより定地ぢやうぢと改あらため

古本ふるほん乃料なりりょうとよ海うみ

同十六年六月永喜ながき中ちゆう風ふうの病やまひに

くわつて八月十九日つねよ率ひらと

歳とし六十四

女子

信貞のぶさだ

孫一郎 京初きやうしつよ生なま家け

寛永七年六月十九日しん世せい二十一歳

信次のぶつぐ

孫平次 生なま玉たま河か家け

判發はんぱつ一いつく永南ながなんと号なづと

寛永十六年十二月朔日しん永長ながが家け

督とくとつつと

將軍家と辨わ一いつと

四月十二日評定場より申上りて  
の事におかす

信勝

又之郎 道春 京都よ生家  
實ハ信時が長男なり 誕生のしるしより  
理法にや—おられくも家をつぐ  
安永十年 信勝亦之歳の時 百一  
歳—く二条北城よりしるしより

東照大権現より賜—を蒙る

同十一年亦同歳より—武外御下  
よりしるし

名瀬院殿より賜—を蒙る

同十二年 信勝亦之歳のしるし

大権現の御よりしるし—判發—

道春の号よりしるし—後府より在位—

つねより湯前より御下—て倭漢の群

書よりしるし—先よりしるし—定地兼に

木乃料とこ酒ふすのら江戸よ  
とむじまこく

台徳院殿の御前よとひく之略と海  
一聖年又漢書とよむ

同十八年

大権現の作よよりく本ぬと野介正純  
書と大明福建道の都督陳子真よ  
つうと時道春 御前よをひく先  
と草と

同十六年

大権現御入浴の時詔大臣 伯よりて  
誓紙と献と道春清原介記秀賢  
おとよひと条目とつくふ

同年京都の近邊より米地を  
とりり別に又年給と給りく  
駿府在任の料とよ

同十九年乃大坂御陣よ修奉  
元和二年

大権現（こころ）豊沛（よみ）の後江戸より来り又  
右徳院殿と稱し奉る

同四年江戸より定地と稱領と  
先より江戸京都のありし時  
付来と

同七年通春を京の時勅し  
新刊皇朝類苑一部と稱ふ又  
沛本一部の誤字と改朱院句讀と  
初よりんごころ先と改と

中院通村卿阿野實顯卿（あのの）これと  
奏と

寛永元年四月十一日

右徳院殿の作より

將軍家よりしるすに  
沛あよりおれ福信貞觀政案  
等乃詔書と稱し先より先  
牒祈云案の事にあつりて  
その廳よりおしむ



同之年六月 勅命よ依て孫子  
之略の讀解とありて又大學等に  
經書乃要旨とありて倭字抄との  
くこれと歎じ

同一年八月沖と海の邊

同六年十二月 作とありて  
民部卿法中叙と

同七年九月 帝即位の時酒井雅元  
古井大炊頭とありて禁裏

りり 宸儀と稱しとそ乃記録  
ありては繪圖と決りて江戸よ  
りりこれ歎  
あし所よ歎じ

同年の者江戸の城外少くも同  
の地とありて又黄金二百あり  
并歎と

同九年二月

右 徳院殿 勅賜 院号の事よ依て

道春沙使とくくし海と

同年食禄六百俵とくくし海と

比内之百俵ハ先年とてていふれと

神領とを介修時の恩賜おし

同十年七月十七日 左駕东殿山

より 還沛の時道春が家塾より

渡沛ありて先聖殿と沙汰

信は信く尚書ノ竟典と海と時

白浪六十枚神領と永長と又時服

とく海と

同十一年忠長郷乃旧館の内大履

一字ありびし厨所とたすりり

これと家塾よりつと

同年日光山乃年中行事書に

増上寺乃年中行事と経書志

くあ度と秋とと毎度 沛前と

とひく沛服と神領と永長と家

とくこれと以載と

同年七月沙上流の信年十八日沙  
系内通春 信とくく物りく沙系  
内の記事はひよ沙入流の記事と決り  
同十二年四月武家門法度十九ヶ  
條評定の時通春永表これ大草  
業と

同十三年四月日光山の沙廟沙  
造替成就の時

將軍家沙系禰の信年通春 信と

之はくくくく新廟の記事と撰ど  
同年十二月物群の信使奉納の時  
之沙系簡るくひよ別稿 信と  
く物りてこれと草と

同十七年四月

大指現二十六年忌の時

將軍家日光 沙金山道長信年 信と  
依く之記とつくふ

同十八年二月七日諸家系圖の事

太田内中守奉<sup>ぶ</sup>の<sup>り</sup>として道<sup>みち</sup>去<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>な  
く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>氏<sup>し</sup>の<sup>の</sup>新<sup>あらた</sup>旧<sup>ふる</sup>其<sup>その</sup>儀<sup>ぎ</sup>を<sup>を</sup>わ<sup>わ</sup>く<sup>く</sup>  
う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>詞<sup>ことば</sup>と<sup>と</sup>え<sup>え</sup>る<sup>る</sup>び<sup>び</sup>う<sup>う</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>を<sup>を</sup>  
し<sup>し</sup>きの<sup>の</sup>儀<sup>ぎ</sup>あり

同年八月十七日 為<sup>な</sup>命<sup>のみこと</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>方<sup>かた</sup>と<sup>と</sup>  
本<sup>もと</sup>朝<sup>あさ</sup>祚<sup>そ</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>系<sup>けい</sup>圖<sup>と</sup>王<sup>おう</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>事<sup>じ</sup>記<sup>き</sup>歴<sup>れき</sup>  
代<sup>だい</sup>氏<sup>し</sup>將<sup>しょう</sup>の<sup>の</sup>譜<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>び<sup>び</sup>う<sup>う</sup>中<sup>ちゆう</sup>華<sup>か</sup>帝<sup>てい</sup>王<sup>おう</sup>此<sup>こゝ</sup>  
譜<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>撰<sup>せん</sup>集<sup>しゅう</sup>と<sup>と</sup>

同年九月二日

竹千代君と祥  
將軍家と賀

同二十年七月朝鮮の信使来朝  
一と國王乃書簡と  
將軍家と賀又一別幅と

竹千代君一と秋と一乃のわひと道春  
ととく  
沙前つり  
皮玉の書簡とよみ  
びり目録乃ととじま

仲とくけし戸りく是と草と  
又年光年川乃此書九通これと  
他と

叔勝

左門 生玉 駿府

母と慈川氏

叔勝四歳の時母よまろくこの駿府より  
京都にともじき成長するにともじ

てふ乃らく書とよみ家におさ  
じふ所の群書と流撮しこく  
倦事か

寛永八年十月叔勝父とあつら  
刃んがくあけ戸よまろく父よ代  
諾生乃くあけ書と録と

同六年六月十九日叔勝江戸  
没と時よ年十七

長女

母ハよハ河ト一京都ヨ生カ  
又兼少ク半世

春勝

又三郎 生玉河ハ  
母ハよハ河ト一

八歳ノ時ヨリ叔勝ヨツク書トモ  
寛永十年十月又一ヨリヨク  
江戸ヨ事ト別髪一ヨク春母ヨ

号ト

四年十一月朔日

將軍家ト稱一 在ル時ヨ長母十七  
歳

四十二年二月丁日ト野ノ先程殿  
少ク釋菜ノ時瑞詔ノ首章一ヲ  
誦ト

四十八年十二月ヨリヨク永南ト  
あるト一評定乃席一ト出仕ト

同十八年二月徳家系圖傳撰集乃  
とき道長よきうひく太田内守  
資宗に乞ふ事にあつて  
編修する時資宗清和源氏とあり  
長母に附とす竹藤原平家并に  
徳氏等と又同事あれども毎事  
と評儀と

同二十年七月朝鮮の信使通政大夫

守勝

尹頌之通訓大夫趙綱通訓大夫申  
濡奉聘の時長母守勝とすかひく  
宗對馬守義成が宅より行くと使よ  
會し即席に唱和して他日又贈答  
ありけしむきうひく太田内守  
朴安副詩あり春母守勝約句乃  
贈答ありしむきうひくあり

右近 母ハよ河一 京都よ生家

幼齡の時より書とよし  
寛永十一年十月父よきこころ  
江戸にてもいふのくさ  
りて

女子

母よに因りて 生誕日前

家紋 松葉 式々 桜葉



